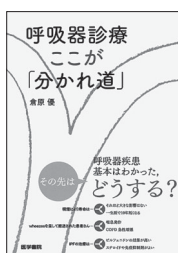


[評者]
長野宏昭
沖縄県立中部病院呼吸器内
科



呼吸器診療 ここが「分かれ道」

倉原 優 著

● A5 頁260 2015年
定価：本体 4,000 円＋税
[ISBN978-4-260-02135-7]医学書院刊

本書は、呼吸器分野の診療で遭遇する、素朴ではあるがよくある疑問に対して、エビデンスやガイドラインを紹介しながら、それらに対する筆者の見解を交えつつわかりやすく解説している。

私たち臨床医は患者の診療を行うに当たって、さまざまな臨床データを参考にしながら行っている。いわゆるエビデンスに基づいた医療が現代医学の基本であることは言うまでもない。しかし、どのようなエビデンスを基に診療を行えばよいのか、あるいはエビデンスを目の前の患者にどの程度適応すればよいのか、ふと立ち止まってしまう場面も多いのが現実である。

例えば、中等症以上の気管支喘息と診断された患者に対して、ほとんどの内科医はコントローラーとして吸入ステロイドを処方することができるであろう。しかし、数ある多くの吸入デバイスのなかからどの吸入器を選択すればよいのか、LABA との合剤にすべきかどうか、ステップダウンをどのようなタイミングで行うべきか、などに関しては、喘息診療を始めたばかりの研修医や呼吸器を専門にしていない内科医にとって

は、ふと立ち止まって考えてしまう場面かもしれない。

著者の倉原先生はこのような場面を「分かれ道」と表現し、道標となるエビデンスやガイドラインを紹介したうえで、そのエビデンスを実際の日常臨床にどのように適用していくのか、その思考過程を明確に、わかりやすく示している。単に文献を紹介するだけではなく、患者の目線に立ち、サイエンスを「血の通った人間」に対して有機的に用いていく思考過程に好感がもてる。エビデンスを重視しながらも患者の心や個性を大切にしたいと願う、著者の内に秘めたる熱い想いがうかがえる。図表が多く用いられており、知識も整理しやすくなっている。

あえて注文を付けるとすれば、肺がんと呼吸器感染症の分野が少なく、やや物足りなさを感じた程度である。

本書は呼吸器診療に携わる多くの研修医、プライマリケア医、内科医、専門医にとって、今すぐ参考となる良書と言える。ひとむきに日々の診療に携わる多くの医師に一読して頂きたいと願う。